

さらりとして白っぽい

辻 憲男 (文学部教授)

「僕は空を見上げ、薄く曇った朝の空気を胸に吸い込み、僕という人間を作ってきたこの土地について想い、この土地に作り上げられた僕というひとりの人間について想う。そのような、言うなれば、選びようのないものごとについて。」

1997年、芦屋川から岡本へと歩きながら、村上春樹は“傷ついた故郷”について考えた。空と土はあの日以前と変わらない。阪神間の土はさらりとして白っぽい。よけいに空き地が目立つ。高校までを過ごしたこの土地には、やがて僕の記憶とはちがった新しい風景が生まれるだろう。しかしそれと僕との間には「自明な共有感」はもはや存在しない (『辺境・近境』)。

閑話休題、神戸の最も古い伝説の一つに、ウナヒ乙女の悲話がある。乙女が二人の男からプロポーズされながら、争いが起らないように、みずから命を絶ったという“生田川伝説”である。乙女の塚は阪神電車石屋川駅南西の国道43号線沿いに、一人の男の塚は同じく住吉駅近くの公園の中にある。もう一人、地元の男の西求女塚 (にしもとめづか) は西灘駅の東にあり、1993年に土中から鏡がたくさん見つかった。過去の地震で古墳がくずれ、盗掘されずに埋もれていた。かつて大地震が神戸を襲ったことの痕跡だった。

わが大学の元学長・三東哲夫は地震学者だった。神戸大学在職中からたびたび危険を警告し、その講演が大きく報じられたことがあった＝写真。くやしいことに、天災の恐ろしさについて我々はあまりにも鈍感であった。



くやしくも大地震の日の15年前、1980年1月17日。翌日の神戸新聞。